

第16回 日能研

# 文学コンクール



## 奨励賞

【創作文】カメラタさん

大谷高等学校・二年

河本 和さん

### 作品に対する思い・感想

この度は奨励賞に選んでいただき、嬉しい限りです。奨励賞。いい響きですね。賞の中で一番好きです。

物語を描くとき、私は好きなものを詰め込みます。今回は、カメラ(写真)と不思議な世界観。ここに飛び込めたら、どんなに幸せだろうか。そんなことを考えながら形成していきます。いつもは脳内で映像化して終わるんですが、文学コンクールなので小説化。でも、文字にするって難しいですね。これからどんどん精進して行こうと思います。

私は写真が好きだ。写された景色は、当時のことを思い出させてくれる。だから、私は写真に世間受けのするような美しさを求めている。その時、パツと撮った写真が、その先ずつとその人と共に歩んでくれるのなら。どんなに拙くても、脆くても、汚くても。そう、どんなものであるうとも。すべての写真を愛するだろう。

「カメラさん」

窓から顔を覗かせている同居人に、静かに声を掛ける。カメラさんはいつもカメラを首から掛けている生粋の写真好きだ。ほんの一ヶ月くらい前に出会ってから、同じ写真好きとして一緒に暮らしている。けれども、彼は写真を私に見せてくれたことがない。理由を尋ねると「見せられたような写真じゃない」といつも困ったように笑う。そんなカメラさんが、私の声に反応して振り向いた。見慣れた、楽しそうな顔だ。

「出かけようか」

カメラさんが窓も閉めずにこちらへ駆け寄ってくる。隣に来たことを確認して、玄関に向かう。扉を開けると、とても綺麗な青空が広がっていた。

出かける時は、基本的に同じコースに行く。ときどき、途中で寄り道をしたりもする。一番の寄り道は、山まで行ったことだったか。

今日は、いつものコースで行くことになった。なった、といっても、そこまで厳密に決めているわけではない。カメラさんと見合って、雰囲気を決めている。午前中は、いつものように見慣れた街を何枚もカメラに収めた。カメラさんとぶつかって、ぶれてしまった写真が撮れたりもした。カメラさんが消さないの、と聞いてきた。消さないよ、とその写真を眺めながら答えておいた。

昼時になった。カメタさんに何処で食べようかと問う。どうせいつもの処だろうと考えながら返事を待つ。カメタさんにはお気に入りのお店があるのだ。出かける時は、いつもそこで昼飯を食べる。私はあの味があまり好きではない。だが、食べているうちに慣れてきて嫌いではなくなった。美味しくないのには変わりないが。

一分がたった。こんなに返事がないのは珍しい。段々心配になってきた。顔を覗き込む。大丈夫か。そう尋ねようとすると、カメタさんが口を開いた。あの楽しそうな顔で、カメタさんが言いそうにない場所の名前を発した。私は少し驚いたが、偶にはいいだろうと近くのファストフード店を探した。見つけたファストフード店は人気なようで、人で溢れている。空いていた角の二人席に案内される。窓からの景色が何とも乙なもので、シャツターを切る。すると、カメタさんもカメラを窓に向け、シャツターを切った。撮れた写真を見て、キラキラと目を輝かせている。その光景を見ると、カメラ初心者の頃を思い出して懐かしい気分になる。カメタさんは楽しそうだ。いや、いつも楽しそうなのだが、それ以上に。そんな様子を見ると、何だか私も楽しくなってきた。そのせいだろうか。いつもと違う雰囲気だからだろうか。それとも周りが騒がしいからだろうか。私は無意識にこう発していた。「カメタさんってすごく普通だよね」

それは、心の奥底でずっと思っていた言葉。カメタさんはカメラをいじる手を止めた。不思議そうにそれはどういう意味か、と尋ねてくる。

「いや、悪い意味じゃなくてね」

一体どう答えればいいのか分からず、浮かぶ言葉を放つ。カメタさんの顔が益々訝しげになる。

「何とどうか——」

何というか。――模範的。そう。模範的なのだ。カメラさんとして、嫌な思いをした覚えがない。いつものあの店は除いて。だが、あれは好みの違いで、人格的に問題があるとか、そういうものではない。そう、カメラさんは人間が理想とする「普通」なのだ。

「憧れ……かな」

出した結論をどう伝えればいいのか。そんなことすら分からず、適当な言葉を投げつける。カメラさんは少し困ったような笑顔を浮かべていた。ああ、こんなこと言わなければよかった。何分か前に戻るのならば、どんなに長い寿命を払ってでも戻るだろう。

その後は、ずっと沈黙の時間が続いた。周りには沢山の人がいたはずなのに、聞こえてくるのはカメラさんがいじるカメラの音だけだった。

昼食を終えて、再び街を歩く。もう少して、カメラさんのお気に入りスポットだ。そこに着くとカメラさんは夢中で撮り始めてしまう。それまでには、謝っておきたいなあ。そう考えながら撮った写真は、少しぼやけて思えた。ふと、カメラを構えるカメラさんを見る。そこにいつもの楽しそうなカメラさんはいなかった。何だろうか。惰性で撮っている。そんな感じがするのだ。ああ、ダメだ。もう耐えられそうにない。歩幅小さく、音も立てずにカメラさんの方へ向かう。呼吸を整える。カメラさん。そう呼びかけようとすると、カメラさんが振り向き、先に話しかけてきた。

「ササキさん」

少し動揺した。名前を呼ばれるのは、何だか久しぶりな気がしたのだ。カメラの底に手を当ててから、何、と返事をする。

「昨日、何処に行っていましたか」

拍子抜けだった。何か思い詰めたような雰囲気でも聞いてくるものだから、恐ろしい質問でもくるのかと身構えていたのに。普通に返答しようとして、私は口を押さえた。……ああ、そうだった。口から徐に手を離す。作り笑顔で、ちよつとそこら辺を、と答える。バシてるんだらうな、と心許ない気持ちになる。カメラさんはカメラを強く握りながら、じゃあ、と震えた声を出した。

「どんな写真も、愛せますか」

それは、今更な質問だった。当然。少し間を開けてから、そう答えた。私がどんな写真でも好きだということとは、初めて会った時にカメラさんに言ったことじゃないか。カメラさんがこちらにゆつくり近づいてくる。首から下げているカメラを外す。何も言わずに私の前にそれを差し出す。私は自分のカメラから手を離し、それを受け取った。カメラさんの温もりは無いはずなのに、不思議と感じ取ることができた。どうすれば良いのか戸惑っていると、カメラさんが静かに言った。

「写真、見てください」

まさかだった。あれほど嫌がっていたのに。本当にいいのか。そう尋ねると、カメラさんが頷いた。震える指で、再生ボタンを押す。画面にカメラさんの写真が写し出される。思わず目を瞑る。恐る恐る目を開ける。視界に飛び込んだ写真は一瞬黒だった。景色など、一つも写し出されていない。しばらくの間、理解できなかつた。少し冷静になって、カメラから目を離す。電源が切れていることを伝えると、カメラさんは首を横に振った。

「それが、僕の写真です」

嘘だ。そんなはずはない。カメラさんが写真を撮る姿は、何度も見てきた。確かに、カメラは景色を捉えていた。何処かに押し付けていたことなんてない。ボディークャップもちやんと外していた。こ

の目で、何度も見ている。もう一度、カメラに目をやる。黒。真っ黒。これ以上はない、黒。削除ボタンを押してみる。そこには、削除しますか、という文章が写し出されていた。震えた目で、カメラさんを見る。小さな声で、言葉を紡ごうとする。カメラさんは、私の心見透かしたかのように呟いた。「故障じゃ、ないです。カメラ屋さんに行きました。修理する箇所がないと、言われました」

驚きの声を紡げない私の口は、遂に開くことすらしなくなった。カメラさんのカメラを肩に掛ける。自分のカメラを首から外し、カメラさんに差し出す。カメラさんは、要りませんと笑って言った。

「実は、このカメラ、一代目じゃないんですよ」

今まで買ったカメラ、全部こうなんです。そう、寂しそうに笑うカメラさんは日陰に立っていた。なんだ。こんなことなら。カメラさんがそんな顔しなきゃいけないのなら。写真なんて、見せてくれなくたってよかったのに。ずっと、知らないままでいたかった。

「不思議ですよね」

普通なら、どうすればよいか分からないでしょう。そう続けて、カメラさんは太陽を思い切り睨み付けていた。暫くして、カメラさんがこちらへ近づいてきた。肩に掛けているカメラに手を伸ばす。カメラの紐を握りながら、カメラさんは下を向いた。

「でも、僕は何処へ行くべきか、何となく分かっています」

カメラさんは、真っ黒なカメラを首から下げて、走り出した。

カメラさんが向かっている方向は、いつものコースとは全然違うものだった。カメラさんのお気に入りに内緒で歩いた道だ。カメラさんが知らないはずの道。私は待ってと何度も叫びながらカメラさ

んを追う。そこへ行つてはダメだ。カメタさんは、知らない方がいい。でも、そうか。この道を走っているってことは。もう既に――。

着いてしまった。私が昨日行つた店。その店の名前は。

「欲しい人店」

カメタさんがその店の前で足を止める。私も走ることをやめる。カメタさんはこちらを見ている。太陽を背に、しっかりと私を捉えている。

「ここ、合ってますよね」

静かな声で、そう、尋ねてきた。真剣な眼差しだ。もう、潮時なのだろうか。ふらつく足取りで、カメタさんの元へ行く。溜息をついてから、カメタさんの目を見つめる。

「……合ってます」

その時、店の扉が開いた。店主が顔を出す。こちらに手招きをしてくる。私はカメタさんの手を引いて店の中へと入って行つた。

昨日ぶりの風景に、酷く嫌気がさす。カメタさんは先程までの雰囲気かのように楽しそうに顔をしている。カメタさんにとっては、一ヶ月振りの風景だ。もっとも、あの時のことなんて覚えていないだろうけど。私とカメタさんはソファに腰を掛ける。差し出されたお茶に手をつける気にもなれず、カメタさんの方に寄せる。カメタさんは嬉しそうに笑っていた。店主が私に話しかける。

「どうしますか」

なるほど、予想通りの質問だ。だが、予想できるからといって答えられるわけではない。私は全てを使つて、答えを探していた。ふと、一ヶ月前のことが鮮明に思い出された。

私は独りだった。初めはそれでよかった。写真は自分の思い出を残すもので、誰かと語るものではないと信じていたのだ。だけれど、段々、語り合う相手が欲しくなってきた。私は何とかしようと思案し始めた。SNSとかいうやつは、相手との距離が感じられてしまうのであまりやりたくない。かといつて、周りに写真好きがいるかと言われると、いないのだ。写真スポットに行っている人たちはどうだ。いや、あの人たちは美しい写真を撮りに来ているのだ。けして、些細な写真が撮りたいわけではないだろう。ああ、こんなに悩むことになるのだったら一人くらい写真好きの友人を作っておくべきだったなあ。そこまで考えて、次第に何も分からなくなっていく。一旦落ち着くために今まで撮った写真を眺めようと、カメラを取る。その中であつたのだ。何気ない風景を撮った写真の中に、「人を作る『欲しい人店』』という文字が。

私は急いでその店に行つた。場所は、その写真前後の写真でどの辺りにあるか推測できた。店の扉を開くと店主がいた。どうも、と一礼した後、何が欲しいかと尋ねてきた。私はすぐに、写真を語り合う友人が欲しいと答えた。すると、コースを聞いてきた。完璧に再現する高いコースと、どこかに欠陥ができる安いコースがあるらしい。財布を覗いてみる。高いコースを購入するには届かない金額が入っていた。私は少しの欠陥ぐらいは、と安いコースを購入した。その時に出会った、否、作つたのが、カメラさんだ。

昨日、ここに寄つたのは、カメラさんに欠陥がないと伝えるためだ。安いコースなのに欠陥がないなんて、それこそ欠陥だ。それを聞いた店主は「そんなことは絶対にありません」と資料を持ってき



た。資料を見終えた店主は欠陥はちゃんとあると話した。詳細は伝えられない、と店主は私を追い返した。私は頭を抱えながら家へ向かった。

「ここまで思い返し、カメラさんを作ったことを後悔し始めていた。いや、正確にいうと安いコースで作ったことを後悔し始めていた。震える声で、店主に尋ねる。

「欠陥というのは、カメラのことでしょうか」

店主はお茶を机に置き、ゆっくりと答える。

「ええ」

肯定されるとは、分かっていた。だけど、心のどこかで否定してくれるんじゃないかと、期待をしていた。欠陥部分を変えられないかと尋ねた。店主は首を横に振る。それでも諦め切れない。何度も何度も尋ねる。カメラさんは横で困ったような顔をしていた。次第に私の目から涙が溢れかけてきた。情けないなあ、と下を向く。カメラさんが、困っているじゃないか。その時、隣からパシヤリ、という音が聞こえてきた。思わず顔を上げる。横を見ると、カメラさんが満面の笑みでカメラを構えていた。今撮った、真っ黒な写真を私に見せてくる。

「いい写真でしょ」

自信満々に、カメラさんは言った。うん、いい写真だね。確認するようにカメラさんはそう言った。「僕はこの写真、好きです」

また続けて言う。私は何故だかおかしくなって、笑った。そして、カメラさんに静かに、優しく尋ねる。

「カメラさんは、それが好きなんだ」

カメタさんは目を大きくする。そして、口角を上げて、力強い声で言う。

「うん」

そうなんだ。それで、いいんだ。カメタさんは。目に溜まった涙を拭う。腕に滴がつく。さっきまで嫌で仕方なかったこの店の風景が、酷く美しく見える。そう、この店は。私とカメタさんが出会った、思い出の、店。カメタさんにカメラを貸して欲しいと手を伸ばす。カメタさんはすぐに貸してくれた。ああ、なんだ。カメタさんの温もりはしっかりとあるじゃないか。ゆっくりと、カメタさんの方にレンズを向ける。思い切り笑うカメタさんが、黒越しに浮かび上がる。シャッターを切る。撮れた写真はやはり真つ黒であった。静かに、カメタさんに聞こえるように、口を開く。

「私も、カメタさんの写真が好きです」

店を出て、カメタさんと家へ向かう。いつの間にか、夕日が顔を出していた。とても美しい、ずっと眺めていられる、そんな夕日。

「ねえカメタさん」

そう呼びかけると、カメタさんはこちらを見て何、と尋ねてくる。

「夕食はさ」

そこまで言っつて、そういえば私から提案するのは初めてだな、と思ひ、笑みが溢れる。

「カメタさんのお気に入りのお菓子をここにしようか」

それを聞いたカメタさんは、大きな声を出して、大きく飛び跳ねた。二、三回飛び跳ねると、走って随分遠くまで行ってしまった。それに気付いたのか、早足でこちらの方に戻って来る。ふと、夕日に照らされたカメタさんをカメラに収めたいと思った。それも、夕日を収めるカメタさんを。

「カメラさーん。夕日、綺麗だよー」

声はちゃんと届いたらしい。カメラさんは夕日を撮ろうと慌てて私に背を向け、カメラを構える。

ああ、あのカメラにはどんな黒い写真が写るのだろうか。きっと、とても美しいものが写るに違いない。そう思いながら、私はシャッターを切った。